

# 「屑片」としての人間：ロチェスター覚書

著者	生田 省悟
雑誌名	新潟大学英文学会誌
巻	23
ページ	19-32
発行年	1985-12-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/42841">http://hdl.handle.net/2297/42841</a>

# 「屑片」としての人間

——ロチェスター覚書——

生 田 省 悟

その特異な個性の故に、英文学史上で殆ど無視同然の扱いを受けなければならない者がいるとすれば、ロチェスター伯ジョン・ウィルモット (John Wilmot, Earl of Rochester, 1647-80) は確かにそうしたひとりに加えられる。だが、毒を孕んだ鋭い知性と並み外れた放蕩三昧とによって、彼は存命中既に、チャールズ二世の宮廷の内外で半ば伝説的存在と化していたという。所謂アマチュア文士としても名高かった彼は、王政復古期を彷彿とさせる作品を含め、70篇余りの詩群を残しているが、その最晩年に書かれたと考えられているものに、セネカの『トロイアの女たち』からの極く短い翻訳がある。<sup>4)</sup>

After Death, nothing is, and nothing Death,  
 The utmost Limit of a gaspe of Breath;  
 Let the Ambitious Zealot, lay aside  
 His hopes of Heav'n, (whose faith is but his Pride)  
 Let Slavish Soules lay by their feare;  
 Nor be concern'd which way, nor where,  
 After this Life they shall be hurl'd;  
 Dead, wee become the Lumber of the World,  
 And to that Masse of matter shall be swept,  
 Where things destroy'd, with things unborne, are kept.  
 Devouring tyme, swallows us whole  
 Impartiall Death, confounds, Body, and Soule.  
 For Hell, and the foule Fiend that Rules  
 Gods everlasting fiery Jayles  
 (Devis'd by Rogues, dreaded by Fooles)

With his grim griezly Dogg, that keeps the Doore,  
 Are senselesse Storyes, idle Tales  
 Dreams, Whimseys, and noe more.<sup>2)</sup>

セネカの原典とこの作品とを仔細に比較検討する時、これが単なる字義通りの翻訳に終わっていないのは明らかであろう。全体がキリスト教会の伝統を意識したものに置き換えられているし、さらに数箇所がロチェスター自身の論議に合致するよう移行されてしまったりしている。しかし、とりわけ注目したいのは、原典にはなかったものを彼が付け加えている点である。殊に “Dead, wee become the Lumber of the World” 以下3行（但し10行目はセネカの408行に対応）は、ロチェスターが宮廷人として、また詩人として過ごしてきた生涯の果てに発せられた呻と聴きとることもできなくはない。セネカの一節に興味を抱くようになった理由もさることながら、彼はなぜ敢えてこの救いのないような表現を組み入れなければならなかったのか。そして、それが彼の生と文学のあり方にどう結び付いているのであろうか。

『翻訳』には、例えば3—5行やそれと呼応する15行などから嗅ぎわけられるように、原典の語調からはほど遠い、いかにもロチェスターらしい露骨なまでの攻撃性が発揮されている。魂の救済に関して自惚れきっていたり、恐れおののいたりしている人間を強烈に茶化しているのである。いわば詩人の諷刺精神が顔を覗かせているわけで、これは『翻訳』を執筆している際の状況を照らし出してくれる有力な条件だと思われる。

\*

アンドリュー・マーヴェルから「イギリス最良の諷刺詩人にして諷刺詩にふさわしい気質の持ち主」<sup>3)</sup>と評されたロチェスターにとって、まさに諷刺詩は軽妙かつ辛つな機知を存分に発揮できる場であった。対象が特定の個人であれ上流階級全体の風潮であれ、ともかく彼は、有象無象の人間たちを容赦なく俎上に載せ続けて飽くことを知らなかった。「復讐の念に燃えない限り、生氣

あるものは書けない。なぜなら憤怒も抱かず、専ら冷たい哲学の概念に基いて諷刺詩を書くというのは、何の恨みもない人間の喉笛を至極残忍にかっ切るようなものなのだから<sup>4)</sup> という信条を自ら実残したのである。だが、多岐にわたる対象を餌食にしているにもかかわらず、ロチェスターの視野は意外に狭い。彼の諷刺詩の基本的な性格といったものは、例えば “But mark what Creatures women are / How infinitely vile when fair:” (*A Ramble in Saint James's Parke*, 41-42) や “Bawdy in thoughts, precise in Words,” (*On Mistress Willis*, 17) などの、極く平凡な表現にもはっきりと看とることができる。西欧文学で古くから主題としてしばしば取りあげられてきた、この虚偽の仮面という認識を、詩人もやはり己れの問題としたのであった。そしてロチェスター的な尖鋭化の過程を迎える時、これは人間に内在する矛盾の摘出という直載な姿で現われてくる。

詩人は、ただただ因襲や伝統に寄り掛かり、無批判にそれらの持つ権威を吹聴するような事態にとりわけ敏感であった。彼の主要な作品は殆ど例外なく、欺瞞と空疎な見せかけとを攻撃することになる。これを検証するにはどれもが格好の資料になり得るに違いないが、ここでは恐らく最大の問題作であろう *Satyr* (これは一般には *A Satyr against Man* ないし *A Satyre against Reason and Mankind* として知られている) に拠って、詩人の眼を再確認しなければならない。懐疑主義の系譜に連なるに相異なく、その強烈さにおいてゲーテやヴォルテールをも震撼させたと言えられるこの作品には、彼の立場——人間への挑戦——が余りにも大胆に表明されているからである。

ここでは、常識を暴き立て、世間で正統と認められているものを徹底して拒絶し、揶揄しようとする姿勢が貫かれている。まさに逆説の宝庫と言うべきであって、詩人は精神史の玉座に置かれていた理性に向ってさえ牙を研ぐのである。

*Reason, an Ignis fatuus, in the Mind,  
Which leaving light of Nature, sense behind;*

Pathless and dang'rous wandering ways it takes,  
 Through errors Fenny-*Boggs*, and Thorny *Brakes*;  
 Whilst the misguided follower, climbs with pain,  
*Mountains* of Whimseys, heap'd in his owin *Brain*:  
 Stumbling from thought to thought, falls headlonh down,  
 Into doubts boundless Sea,...

(12-19)

人間は自身のうちに授けられた理性を規範として善き生活を送り、理性を行使することで真理へ到る可能性が保証されていたはずであった。ところが、人間の尊厳の根幹たる理性とそれに基く探求を、詩人は迷妄へ導く「鬼火」なのだと決めつけて正面から愚弄し続けている。異端と思われることさえ厭わない詩行の基調は、理性を持つことの意義を一切問わず、徒らに思弁に終始する事態の虚しさを衝こうとする点にあった。即ち、自らの主体のありようを全く顧みようとせず、理性を所有していると思い込んで安閑としていられる、鼻持ならない驕りを露呈することなのである。だからこそ彼は、そうした人間に皮肉たっぷりの墓碑銘さえ用意してくれている。

Huddled in dirt, the reas'ning *Engine* lyes,  
 Who was so proud, so witty, and so wise.  
*Pride* drew him in, as *Cheats*, their *Bubbles* catch,  
 And makes him venture, to be made a *Wretch*.

(29-32)

王政復古期は合理的科学精神に基く新たな思考体系の創成期にも当たっていた。こうした時代の趨勢の背後に、詩人は盲目的な理性崇拜と裏腹の関係にある驕慢そのものを鋭い眼で識別したのである。

ところが、ここまで言いきっておきながら、ロチェスターは一向に筆を措こうとしない。それどころか、攻撃の度合を一層完璧にしようとさえ試みるのである。彼は動物優位思想を援用して、動物の生物学的自然に従った行動との対比の上で、人間の行動原理が「恐れ」に他ならない現実を突きつけようとする。

With Teeth, and Claws, by Nature arm'd they [*Birds and  
Beasts*] hunt,  
 Natures allowance, to supply their want.  
 But *Man*, with smiles, embraces, Friendships, praise,  
 Unhumanely his Fellows life betrays;  
 With voluntary pains, works his distress,  
 Not through necessity, but wantonness.  
 For hunger, or for Love, they fight, or tear,  
 Whilst wretched *Man*, is still in Arms for fear;  
 For fear he armes, and is of Armes afraid,  
 By fear, to fear, successively betray'd.  
 Base fear, the source whence his best passion came,  
 His boasted Honor, and his dear bought Fame.  
 (133-144)

理性に頼るはずの人間の内実を見つめる視線はあくまでも冷やかである。他者との間に確固たる信頼関係を結び得ない人間は、謂れのない恐怖に支配されていて、保身を図るためには裏切りでも何でもやってしまうという。人間は偽善の固まりでしかなかった。

Look to the bottom, of his vast design,  
 Wherein *Mans* Wisdom, Pow'r and Glory joyn;  
 The good he acts, the ill he does endure,  
 'Tis all for fear, to make himself secure.  
 (153-156)

人間は「全ての動物の鑑」であると言ったハムレットの息詰まるような讃嘆、それは詩人にはうつろに響いたに違いない。理性に象徴的に現われる驕りを抱いて浮かれる一方、不信にさいなまれ、恐れに振り回されてしまう人間——日常性に潜む人間存在の内部に踏み入った時、彼はこれを見抜いてしまったのである。彼にとって、これほど滑稽な人間喜劇は他にないであろう。ロチェスターは笑い、嘲けり、そして怒りをぶちまける。

All this with indignation have I hurl'd,  
 At the pretending part of the proud World,

Who swolne with selfish vanity, devise  
False freedoms, holy Cheats, and formal Lyes  
Over their fellow *Slaves* to tyrannize.

(174-178)

セネカからの翻訳とも共通しているのだが、人間への激しい失望感は、このようにして「見せかけ」に深く根差している。その意味で *Satyr* は、「王政復古期における若き知識人たちの懐疑的なリベルタン哲学を恐らく最も鮮明に表明している作品」<sup>9)</sup> であった。

彼の諷刺詩群の到るところで、さまざまの姿をした同時代人たちが踊らされている。そして、彼らの全てが自らの実体を知らず、時勢に駆り立てられるだけといった様相を呈しているのである。もう一例だけをあげておくなら、18世紀に特に評判の高かった *Upon Nothing* では、結末に次のような社会諷刺を見ることができる。

Nothing who dwell'st with fooles in grave disguise  
ffor whom they Reverend Shapes and formes devise  
Lawn-sleeves and ffurrs and Gowns, when they like thee look  
wise:

ffrench Truth, Dutch Prowess, Brittish policy  
Hibernian Learning, Scotch Civility  
Spaniards Dispatch, Danes witt, are Mainly seen in thee;

The Great mans Gratitude to his best freind  
Kings promises, Whors vows towards thee they bend  
fflow Swiftly into thee, and in thee ever end.

(43-51)

ここに描かれた虚飾と実態のずれ——人間は全く当てにできない代物だという空疎な想いは *Satyr* の論旨と完全に重なり合っている。ロチェスターは執様に「見せかけ」を覆さずにはいられない。そして、その行為の現場を私たちの目の前に、次から次へと突きつけてくるのである。

## \*

ロチェスターの諷刺は激しく鋭い。しかしながら、素朴な次元に立って考えるとすれば、他者へのこうした批判は生のあり方を問うという事態において、必然的に自分自身に対する省察へと回帰してこななければならない。詩人であっても、この二面性はちょうどヤヌスの顔のようなものであった。それどころか、むしろ自己認識と他者への呪いは、互いに拮抗しながら彼の想像力を掻き立てていたとさえ言えるかもしれない。諷刺を行なう主体はどのようなものであったのか。ロチェスターのダイナミズムを探る意味からも、（たとえペルソナであるにしても）「私」即ち個としての体験が精神の振幅とより緊密に繋がっている状況を検証すべきであろう。

示唆に富むエピソードを先ず紹介しておかなければならない。死の数ヶ月前に行なわれた元チャールズ二世付き牧師ギルバート・バーネットとの対話において、ロチェスターは熱心な帰依の勧めに対して耳を借そうとせず、己れの偏見を率直に吐露するばかりであったという。バーネットはそれを回想して、脚色なしと断った上で、「絶対者とは単に漠たる存在でしかないのであって、世人が神に備わっていると思い込んでいる善や正義といった属性とは無縁のものだ」とか、「世人が神を愛するなどというのは傲岸の極みであって、空想好きな輩の熱狂に他ならない」などと詩人が述べたと伝えている。<sup>6)</sup> 宗教的懐疑を抱くというのは当時の知識人の間にも見られた現象だが、ロチェスターも神を信仰しきれず、「漠たる存在」——決して理解し得ないもの——としか思えなかった。その地点に立つ以上、捉えようのないものを誠しやかに信じ込む世人の信仰は欺瞞にみちた空想と裁断するしかない。彼は宗教の周辺にさえ、何か胡散臭いものを感じていたのである。

あらゆる権威や伝統的な価値観・道徳律に返逆する精神は、己れの生きざまだけを肯定しようとする方向へ傾斜していくのだが、ロチェスターも例外ではなかった。確かに彼の詩群には、デコラムに背を向け、徹底して卑俗なことを吐き散らすことで成り立っている領域があった。そこで、詩人は感覚的充



足感へ埋没しようと懸命に試みている。視点を変えるなら、これは個としての人間が自身にとっての一種の絶対を求める行為であったかもしれない。“But Pain can ne’r deceive.” (*The Mistress*, 32) という、かなり屈折した表現からも読みとれるように、感覚には直接働きかける説得力があり、快、不快といったものは文字通り肌で感じられる、間違いのない事実だからである。ロチェスターは感覚的体験への指向を、例えば次のような、居直りとさえ受け取れる形で宣言することがあった。

*Cupid, and Bacchus, my Saints are,  
May drink, and Love, still reign,  
With Wine, I wash away my cares,  
And then to Cunt again.  
(Upon his Drinking a Bowl, 21-24)*

だが、“rake poet”の異名をとる基にもなった、自身を生かすべき感覚の世界でさえも詩人を裏切ってしまうのである。何よりの証拠に、どれをとってみても、彼の作品には具体性を持った充足感を謳歌するような場が全く描かれていない。唯一の例外になる可能性を孕んでいたはずの *The Imperfect Enjoyment* (何と暗示的な題) でさえ、スカトロロジー擬の苦々しきで終わっている。あらゆる詩行から判断する限り、ロチェスターの「私」は一度も充たされたことはなかったのである。

こうした皮肉の極みとしか言いようのない経緯を眺める際、決定的な意義を持ってくるのが *Love and Life* であろう。王政復古期最良の抒情詩のひとつと思われるこの作品では、「私」の想いが静かに、かつ細やかに語られている。

All my past life is mine noe more  
The flying Houres are gon  
Like transitory Dreames giv’n ore  
Whose Images are kept in Store  
By Memory alone.

What ever is to come is not

How can it then be mine,  
The present Moment's all my Lott  
And that as fast as it is got  
Phillis is wholly thine.

Then talke not of Inconstancy,  
False Hearts, and broken Vows,  
If I, by Miracle can be,  
This live-long Minute true to thee,  
Tis all that Heav'n allows.

ひたすら愛する者の腕の中に安らぎを求めようとする「私」——読者に強く訴えかけてくるものがあるとすれば、それは過去からも未来からも拒絶され、せめて現在という束の間に縋りつくことだけを願う恋人像に他ならない。だが、それでいながら、誇張表現に支えられた心情は、抛りどころとすべき現在でさえ一瞬のうちに消え去ってしまうものに過ぎないのでは、という不安を拭いきれないでいる。現在を繋ぎ留めるというのは、まさに「奇跡」に等しい。求めることの虚しさを予感しながらも、充足を求めずにはいられない心の揺らぎ——これはロチェスターの根底を象徴的に現わしている。自己がその主体となって係っている個々の体験においてでさえ、生の確信に到るような契機は何ひとつとして見出されていない。詩人がひとつだけ納得できることといえば、それは何の基盤も与えられず、時に流されるままの滑稽な道化としての自分であった。己れの生を肯定しようとする意識が「果敢なく日毎移ろう人間」<sup>7)</sup>という自虐に辿り着く。彼自身、こうした矛盾だらけの喜劇の主人公役を演じてしまっているのである。

\*

言わずもがなのことかもしれないが、ロチェスターの作品の背後には、測りようのない、何か茫漠とした観念への強い意識が働いていると指摘されたことがある<sup>8)</sup>。これは詩人の宗教観らしきものや、*Love and Life* の世界からも

裏付けられるであろう。また、やはり先に言及した *Upon Nothing* では、無からの創造という聖書の伝統をパロディ化する一方で、全ての根源でありながら全てを喰らい尽くす「無」を、詩人は機知を縦横に発揮しながら讀えてもいる。だが、この見解はより厳密なものになるよう修正を受けなければならない。つまり、ロチェスターの場合、理解を超えた漠然とした観念——神、無、時間、空間、無限など——に対する関心と人間への視線には同時性があると言うべきであろう。彼がどのような状況下にあっても、自身を含めた人間はその視野から消えてしまうことはあり得ない。虚空に偶然産み落され、時に隷属するしかない宿命の人間というものこそ、強迫観念のように詩人に付き纏っていたのである。

彼の諷刺詩の性格をこうした脈絡で再確認しておくなら、人知を超えたものに包囲された人間の悲惨な状況と、それさえ知らずに闇雲に驕り高ぶったり、根も葉もない恐れに翻弄されている現実との間に生じる乖離こそ、人間批判の作用因であった。驕慢や不安は、己れの置かれた場を己れのものとして確信できないことに由来する。その因果を詩人は充分承知していたのである。

同時代人に痛烈な呪詛を浴びせ掛けると共に、詩人は内面を凝視することを自らに課した。だが、彼が自身に見てしまったもの、それは感覚の主体が何の基盤も所有していない以上、感覚の領域は決して生の証しになどなり得ないという絶望に似た懷疑であった。自らも、そして自らの抛りどころも虚しいと実感するところに、ロチェスターにおける逆説と命名すべき現象が生じてくる。内と外へと向けられたそれぞれの視線が交錯するどころか、完全に一致してしまうからである。ある意味では、事象を客観化できる能力に欠けていたとも考えられるが、彼は他者において垣間見た矛盾をそっくりそのまま己れの裡に抱え込まずにはいられない。安らぎや確信を全く欠いた、余りにも短い生を送る「ダニ同然」<sup>9)</sup>の人間のどうしようもない卑小さ——それは彼自身をも責めさいなむ判であった。徒らに錯覚などに支配されることなどなく、詩人はひたすらこの宿命を見据えるのである。だからこそ、彼は一人称に託して呟かなけれ

ばならない。

But we, poor Slaves to hope and fear,  
Are never of our Joys secure:

(*The Fall*, 9-10)

結局、ロチェスターにとっての樂園はどこにも見当らなかった。実体もなく、ただ仮象の世界に蠢くしかない存在という動かし難い事実によって、他者と彼の自己とは同一の次元に掃き集められている。全ての営みは空疎なのだという核に向けて、詩人の想像力は急速に収斂していくのである。

\*

ロチェスターの懷疑を座標軸にして『トロイアの女たち』の一節を眺めれば、死後の世界を醒めきった態度で否定している点で、これが彼の共感を呼び起こしたのはかなり容易に理解できるであろう。そればかりか彼は、死が無意味だと述べるに到る由来をも、そこに読み込んでいる。この時、『翻訳』は原典の手から離れて、ロチェスターの個性に密着した詩的世界を展開するのである。この作品における語彙、表現、心情などは、これまで例示してきた詩群の場合と共通する部分が非常に多いことからみても、他でもない詩人自身の論理を構築する要素になりきっている。その意味で、仮に最後の作品でなかったにしても、『翻訳』には彼の詩的営為・生涯の葛藤が総決算という形で凝縮されていると断言してかまわない。

ただ、留意すべきなのは、宗教的背景を意識して仄めかしているからといって、別にこれが神学上の問題に沿って書かれた作品だとは限らないということであろう。詩人は靈魂の不滅を無神論の立場から否定しているわけではない。傍証を挙げておくなら、この作品とはほぼ時を同じくしていると考えたいのであるが、彼はバーネットに「死というのは靈魂が尽きて消滅することではない」<sup>100</sup>と語ったという。このことばと『翻訳』とを照らし合わせてみれば、そこに覗えるのはただ、何ら確信を得られない、掻き乱された詩人の精神だけな

のである。この作品の性急で断定的な口調は、必ずしも彼が納得していることを強く訴えるための手段ではなかった。むしろ、それとは逆の事態を想定するのが自然な見方であろう。ここの論理を支えているのはあくまでも、生の無意味さ・無目的さを予感してしまった時の苛立ちと揺れ動く懷疑に他ならない。

誰もが経験する運命にありながら、誰ひとりとして知り得ない「死」という観念を前にして右往左往することの虚しさ、それは拠りどころを見出せない「生」の姿を否応なしに抉り出してしまう。世人にとっての極限状況をセネカから借用することで、彼は仮象の世界で演じられるに過ぎない生を見つめるよう仕向けているのである。この作品の攻撃性や終末部で見られるマクベスに似た科白などは、そのような観点から正当化されなければならない。そして、彼が敢えて書き加えた、純粹に彼自身のことば、“Dead, wee become the Lumber of the World”は詩人としての技巧を完結させるべき機能を果たすと同時に、己れに係る生に対する懷疑の端的な表現そのものでもあった。

ロチェスター自身も冗談まじりに「女・政治そして酒——現代の三つの仕事」<sup>11)</sup>と言っている通り、チャールズ二世を中心とする社会は、およそ宮廷や過渡期といったものから連想される性格と風潮を殆ど全て兼ね備えていた。浮かれた雰囲気と、その背後に潜む得体の知れないものが錯綜し、渦巻いている只中であって、自ら矛盾を生き、見極めようとした詩人はまさに王政復古期そのものによって形成された人間であった。例えば、ドライデンが一種の平衡感覚を自己のモラルの中心に置くことで、したたかにその時代を生き延びたのとは違って、ロチェスターは見せかけと実体との間の「ずれ」をあくまで己れに還元しなければならなかった。独断に偏った狭さを示しているとはいえ、そうした点にこそ、彼なりの潔癖さと一貫性が求められるべきであろう。しかしながら、彼は、眼の前に繰り広げられる人間世界の現実を現実として容認できるような、成熟したゆとりといったものを知らなかった。これが、早世と言うだけでは片付かない、ロチェスターにおける限界とでもいうことになるのかもし

れない。

ともかく、人間という存在は彼を苦悩させ続けた。しかも、人間の無意味さを暴くことに何の意味があるというのか。彼の作品群には、この次元にまで遡って問い掛けていると考えられる場合すらある。袋小路に追い込まれた詩人の懷疑は際限を知らない。「空の空、空の空なる哉。すべて空なり」——『伝道の書』のことは彼の耳にどう聞こえたことであろうか。

(註)

- 1) この詩を読んで感激した Charles Blount が1680年2月7日付の書簡を詩人に送っていることから、これがほぼその直前に書かれたと一般には考えられている。ただ、未見ではあるが、より以前の作とする異説もあるらしい。この点については Keith Walker, ed., *The Poems of John Wilmot, Earl of Rochester* (Oxford, B. Blackwell, 1984), pp. 254-255 を参照されたい。
- 2) ロチェスターからの引用は Keith Walker, ed., *The Poems of John Wilmot, Earl of Rochester*, *ibid.* による。なお、セネカの原典と英訳とを F. J. Miller, tr., *Seneca VIII* (London: Heineman, 1917) によって挙げておく。

Post mortem nihil est ipsaque mors nihil,  
 velocis spatii meta novissima.  
 spem ponant avidi, solliciti metum;  
 tempus nos avidum devorat et chaos.  
 mors individua est, noxia corpori  
 nec parcens animae. Taenara et aspero  
 regnum sub domino limen et obsidens  
 custos non facili Cerberus ostio  
 rumores vacui verbaque inania  
 et par sollicito fabula somnio.  
 quaeris quo iaceas post obitum loco?  
 quo non nata iacent.

(*Troades*, Act II, Chorus, 397-408)

(There is nothing after death, and death itself is nothing, the final goal of a course full swiftly run. Let the eager give up their hopes; their fears, the anxious; greedy time and chaos engulf us altogether.

Death is a something that admits no cleavage, destructive to the body and unsparing of the soul. Taenarus and the cruel tyrant's Kingdom and Cerberus, guarding the portal of no easy passage—all are but idle rumours, empty words, a tale light as a troubled dream. Dost ask where thou shalt lie when death has claimed thee? Where they lie who were never born.)

- 3) O. L. Dick, ed., *Aubrey's Brief Lives* (Harmondsworth: Penguin Bks., 1962), p. 481.
- 4) Gilbert Burnet, "Some Passages of the Life and Death of Rochester," *Rochester: The Critical Heritage*, ed. D. Farley-Hills (London: Routledge, 1972), p. 54.
- 5) James Sutherland, *English Literature of the Late Seventeenth Century* (Oxford: Clarendon Press, 1969), p. 172.
- 6) Gilbert Burnet, *op. cit.*, p. 60.
- 7) Elizabeth Barry 宛書簡。Jeremy Treglown, ed., *The Letters of John Wilmot, Earl of Rochester* (Oxford: B. Blackwell, 1980), p. 148.
- 8) D. H. Griffin, *Satires Against Man: The Poems of Rochester* (Berkeley: Univ. of California Press, 1973), p. 9.
- 9) *Satyr*, 76-79参照。
- 10) Gilbert Burnet, *op. cit.*, p. 53 *et passim*.
- 11) *Letters*, *op. cit.*, p. 67.